

265. カマス押寿司

これを企画した動機が思い出せない。「なんとなく」と表現されるような軽率な心持ではないし、何らかの計算や作為が働いた記憶も全くない。たぶん、何らかの根源的な無意識な衝動がそうさせたのだろう。その「何らか」さえも全く分からない。

しかし、具体的にレシピを考えたり調達等の行動を起こし、試作・撮影・試食に至った



のは、事実である。ふわりとした夢想や妄想に浸っていたのではなく、現実である。

なぜ酢飯に白胡麻を入れようとしたのか、自分でも説明できない。これも本能的なものなのか、他のお鮓で白胡麻を混ぜ込んだ経験・体験が無意識にそうさせたのか分からないが、唾液の分泌を大いに促した。また、「すだち」も好い仕事をしてくれた。産直売場でたまたま見かけた石川県産の「すだち」。何かに使う対象や目的が具体的に決まっている訳ではなかったが、「とりあえず買っとくか」程度の軽い気持ちで購入した。この時点で、カマス押寿司の企画やすだちを使用することも企図していないし、知る由もない。

結果としてそれらが奏功し、後を引く口福をもたらした。「作為がない」は、陶芸界の境地と聞くが、これがお鮓の世界にも通じるとは。無作為を作為するのは論外。